口頭発表Ｂ③

実習教育を協同学習の観点から捉え直す
～日本語教育演習・日本語教育教材研究の実践から～

Gehrtz-三隅友子
（徳島大学国際センター）

１．はじめに

総合科学部専門科目の「日本語教材研究」（旧カリ名称「日本語教育演習」）では、日本語教育の手法を実践的に学ぶ実習教育を行っている。2010 年前期には、日本語学習者を対象に学習支援型の実習授業を行った。それは、受講生 14 名が、2-3 名で 5 班をつくり、月曜日から金曜日に毎日 90 分、2 名の留学生に対して、グループで実習を行うものであった。本発表では、この活動を従来のグループ学習とは違った「協同学習」という視点からの分析、考察を試みる。

２．授業の概要

本授業は、「日本語教授法」「日本語教育方法論」と同様に、国際センターの日本語教員が総合科学部にて担当する日本語教育の科目の一つである。受講者の意識は、言語教育に関心がある、あるいは将来留学したときに役に立つだろうといったように、必ずしも日本語教員を目指しているとは限らない。それゆえすぐに教壇に立って教えられることよりも、①日本語を学ぶ人たちの情報②日本語の教材に関する知識、さらに③学習者が日本語を習得していく過程の三つを体験的に学ぶことを今年度は目的とした。

実習までに、コースデザイン（レディネス調査、シラバス・カリキュラム・教材等）また言語学習のプロセスについての概要と教案作成に関しての講義を行った。その後 5 月 6 日から 7 月 15 日までを実習期間とし、本授業時間の毎週木曜日の 1・2 限は、各担当曜日の実施内容と問題点の報告及びその対処を検討し、残りの時間を、次週の各担当の準備に当てた。全体への働きかけと同時に、教師は個別に相談にのり、また教案の書き方等の改善点を指示した。

３．実習の概要

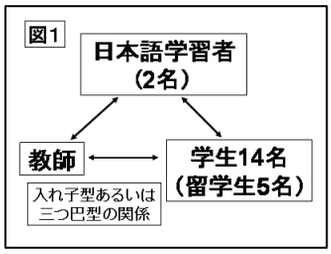
本学の研究生である日本語学習を希望する 2 名（中国内モンゴル出身）を被実習生として、受講生の日本人学生9名と留学生5名（アメリカ1、韓国１、中国３）の計 14 名で前述のように担当を決め、木曜日 1･2 限の授業（★）以外に毎日担当の実習を（☆）行った。（表）

	月	火	水	木	金
1/2				★	
3/4	☆		☆		
5/6					
7/8		☆		☆	☆

日本語学習者は、全くのゼロ初級ではなく、既に自国で「みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ」（ｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ社）を学んでおり、今の知識としての理解をさらに運用へとつなぐことを第一の目的とした。

教材は、副教材として独自に開発した「ふたりの日本語Ⅰ・Ⅱ」また市販の「聴解タスク」「初級で読めるトピック」「標準問題集」（同じくｽﾘｰｴｰﾈｯﾄﾜｰｸ社）等を使用した。1 日 1 課で 50 課を終えたため、各担当はほぼ 10 課を準備等で学習項目を詳細に確認・検討したといえる。

流れとしては、各曜日毎に、教案を事前に作成し、授業後変更点や問題点を書き加えて記録する。そして毎回文法や表現（さらに後半には短文日記も）宿題を提出する。次の曜日の担当者は、前回の教案を実習前に確認し、さらに提出された宿題のチェックを行う。学習者 2 名に対してペアで学習を進めながら、宿題担当、聴解問題担当とグループによって各分担を決めて臨むようにした。また教案と報告による他班との引継ぎの重要性も強調した。



４．協同学習の視点

従来のグループ学習と協同学習の違いは、下の図で表されるように、人を単なるかたまりとした集団を扱うのではなく、①肯定的な人間関係②精神的な健康③成果、を基本目標として<u>教師が設定する</u>という側面を持つ点である。（図２）

５．評価と考察

14名に対して、①6月10日（第Ⅰ分冊終了後）②7月8日（第Ⅱ分冊終了後）各担当毎の「感想・問題・これからの取り組みに関して」③7月22日「１）言語学習の体験に関して　２）言語学習に関しての考えの変化　３）他メンバーに関しての評価　４）取り組みに関する自己評価」の記述を求めた。

受講生の振り返りから以下を得た。

・学習者及び実習生同士の精神的距離感の変化
・日本語の捉えなおし（母語話者・被母語話者）
・日本語を学ぶ立場から教える立場への変換
・日本で日本語を学ぶことの意味
・非母語話者の存在の意義
・学習者が上達していくプロセス
・教える側と学ぶ側の関係性
・学習者が困難に思う点への気づき
・欠席や遅刻による学ぶ側の環境の変化
・教える内容と表現したい内容とのずれ

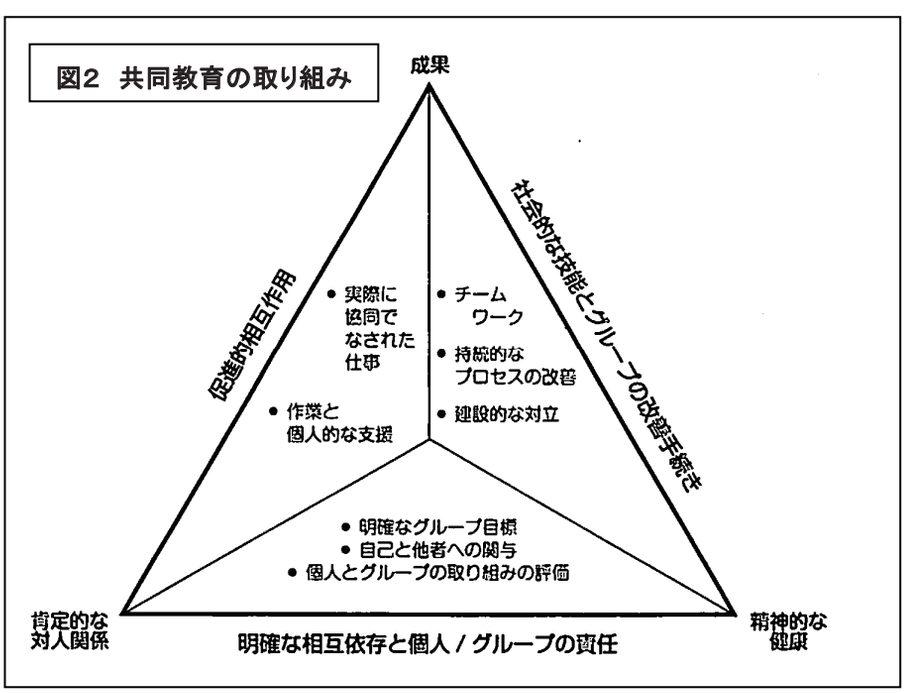
６．むすびにかえて

学習者の日本語能力は 2 回の試験と日記及び会話テスト等でその伸びは確認された。さらに実習生の本授業において、教師側が意図したねらいに対する気づきも概ね認められた。

本発表では、前述のねらいをさらに超えた、各担当班毎の相互評価さらに各人の自己評価から、教師の「協同教育」の設定に関する問題点を明らかにし、今後の改善点を提示する。

参考文献：ジョンソン,D.V./ジョンソン,R.T.他著　石田裕久他訳（2010）
「学習の輪～学び合いの協同教育入門～」二瓶社

（図２は、本書 14 頁より引用）



参考写真　実習の様子
月･火組